# 博物館だより

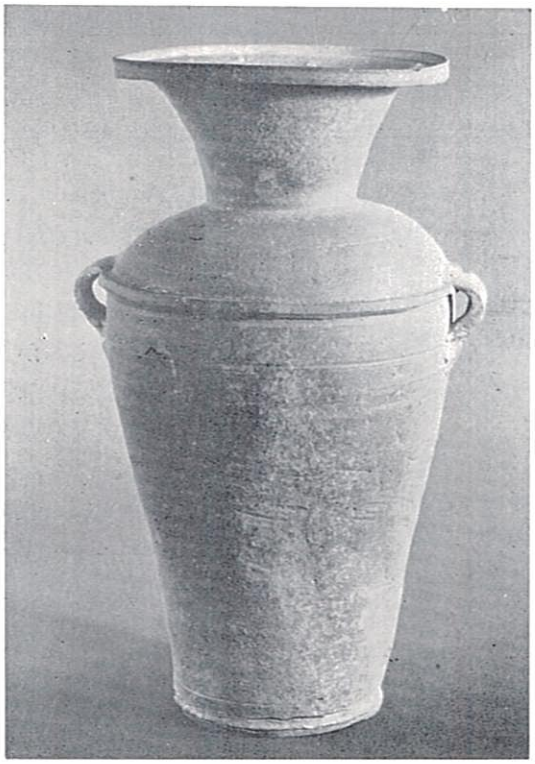
昭和47年3月1日(1972)
岡山県立博物館館報 No.1


## 館蔵品コーナー

**須恵器耳付壷**　邑久郡長船町出土　平安時代

高さ36.0cm×胴径20.0cm×口径18.5cm×底径11.5cm

開館特別展のポスターに出されたこの須恵器は期間中県内県外の多くの観覧者からも注目を集めた資料の1つである。邑久郡長船町内にある窯跡群から出土したもので我々の鑑定では今のところ平安中期〜後期の遺物ということになっている。奈良時代からこの時期に至る須恵器――つまり朝鮮伝来の技術がかなり変質した須恵器の1群――を指して中間土器と呼ぶことがあり、この壷もやはり須恵器から六古窯の雄備前焼への過渡期にあたる1資料である。



成形方法は紐作り・叩き締めののち、回転台の上で廻しながら、表面がなめらかにされている。28センチメートルの本体の上に、朝顔の花弁のような8センチメートルの口が立上がり、口端はやや垂れさがりぎみから、直角に折りまげられたように上向いている。また肩には幅5ミリメートルの突帯と双耳がある。焼成直後には、火表の胴と立上がり部分に自然降灰による緑褐色の釉がかなりかかっていたが、風化により剥げ落ちている。

成形が不自然だったためか、火裏と底に窯ひびがありセメントで補修されている。全体に薄作りで優美な姿をしており、都への献上品（花生）として作られたが、焼き損じたため、灰原へ捨てられたものであろう。形からくる印象は高貴そのものだが近づいてよくよく見ると作者の精神・技術の衰退は覆いがたく、名門“邑久郡の須恵器“の斜陽を感じさせる。間もなくやってくる備前焼の成立は、はたしてこれらの工人とどのような関係があるのだろうか。継続的に並ぶのだろうか。またある一時期平行線をたどるのだろうか。岡山県窯業史にとって今後の大きな研究課題の1つである。（上西）

# 発刊にあたって

館長 石川吉郎

昨年8月29日に博物館が開館して半年余になる。その間早く館報を出したいと思い乍ら、11月3日からの常時展の準備やら、46年度の資料の購入やらでとりまぎれ、今日やっとその運びになった。

その間に、山陽新幹線大阪、岡山間が開通して運転を始めた。それは私共博物館にとっても関係の深い出来事と考えねばならない。東京と岡山との往来が4時間10分になると、人と物の動きが極めて迅速になって、地方の博物館のあり方もその情況の中で十分再考してみねばならない。結局は、吉備文化のすぐれた遺産を、それを生んだ風土の中で見て貰うこと、その為に可能な限りの努力をすることが益々肝要になると思う。

そうすることで、出来るだけ多くの人に親しんで頂きたいものである。その為に、一人でも多くの県民の方々や、他の博物館や大学や夫々の分野の専門家の方々との人間関係を絶えず温めていかねばならない。

博物館に何か新しい資料が入ったり、新しいプログラムがあるときは早く連絡したいし、一方では博物館に対する御意見も登載して参考にさせて頂きたい。

そんな原稿でこの「博物館だより」を皆様にお届けしたい。

未熟ではあっても、可愛がって、育てて頂きたいと思う。

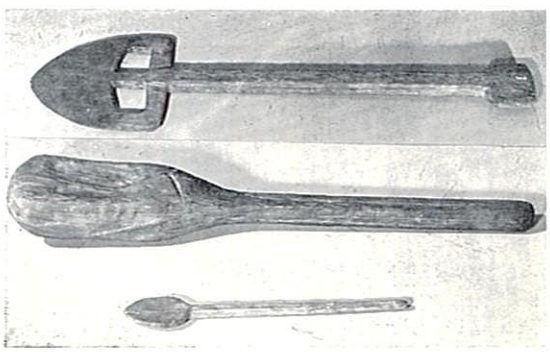
# 木器の複製

縄文時代までの生活が採集・狩猟という天然資源に100％依存したものであるのにくらべて、弥生時代は農耕が生活の中心になり人間が自然を積極的に利用する生産活動がはじめられた。現在までに復元・複製された木製農具は滋賀県琵琶湖東岸にあたる「大中の湖南遺跡」出土のもの9点、岡山市津島遺跡出土のもの4点である。

木器はほとんどは堅いカシの木を材料としてつくられているが2000年をこえる年月を泥土のなかですごしたために腐朽がはなはだしく、直接に石膏やシリコン・ラバーをあてて型をとることはできない状態であった。そこでまず粘土でコピーがつくられ、これをもとに型をとり、それに樹脂が流しこまれるという能率の悪い、そのうえ微妙な変化を再現しにくい作業がおこなわれた。色が濃淡にぬりわけられているのは、推定復原部分を示すためである。濃い部分は木質部の残存しているところを、淡い部分は復元したところを示している。

平鍬・また鍬・丸鍬（じょれん）・杵などその形は日頃見なれているものであるだけに、別段に興味をひきおこさないかもしれないが、多くの重要な謎をひめている。

これら農具の形は日本のなかで少しずつ改良されたというよりは弥生時代のはじめから各種の用途に応じた種類が用いわけられたらしい。しかしどこから日本へ伝播したかということになると不明なのである。稲の原産地である東南アジアの農民は犁の他に、このような複離に分化発達した耕具は用いていない。使用されはじめてから2000年以上、今日に至るまで変化する必要のないほど、はじめからすぐれた道具であったのか、逆に停滞していたのか。(岡本)



# 民具収集奮戦記～和紙のふるさとをたずねて～

紙はさみい（寒い）寒がエエでナ、佐用（兵庫県）から紙買がきたデ、牛に紙を負わせてナ、山田の庄ベエさんやトラさんいうてナ、山を越して毎年来なさった。当時米が1升10銭のとき紙2しめが3円から4円したナ、1しめいうのは500枚のことで1しめ漉くのに3日はかかったナ、ウチかな、ウチは昭和18年ごろまで漉いとったが戦争でやめてしもうた。いま張っとる家の障子は全部ウチが漉いたもんでナ、エエ紙じゃから5年に一ぺん張りかえますよ。この村には紙すき屋が3軒あってナ、カゴ（コウゾ）ばかり漉いたですよ、ミツマタは高かったナ、カゴは畑の岸に植えたから今でもそれが残っとりますよ。

明治23年生まれの宇野美喜代さんは若いころを回想して口早に語ってくれる。ここは岡山県勝田郡勝田町赤坂という中国山地の奥深い山村である。岡山から自動車で約2時間走り続けて探しあてた今まであまり知られていない紙漉村である。民俗学会理事の土井先生から教えられ勝田町の前教育長富坂先生に案内をお願いした。

岡山県では手漉和紙は殆んど流し漉の技法で行われているがこの宇野さんのやり方は溜め漉といい簀桁も独特のものを用い簀きあげたまゝで、簀桁の中の水を流してすてないのである。宇野さんは今年82才とも思えない若々しさで、

本丁紙を見ながら話してくれる宇野さん

紙をすくのはエライ（苦しい）だでもう今はやろうとは思わんですよ、たいしてもうかる仕事じゃないけんどゼニになるんでナ、仕方なしに冬の間はやっとった、そうだナだいたい八十八夜ごろまで漉くんですよそれからあとはヌクウなるでナ、トロ（トロロアオイの根からしぼった汁）がきかんようになるよ、トロは舟にオケーぱいを入れたかナ、ウチのは本丁紙というて、ソレ昔大幅帳の表紙のシンに使うヤツですよ。

ひとしきり話をすますと倉へ案内された。なんとスキフネ、バンダイ、コウカイボウ（叩解棒）など

紙を漉く家

紙漉用具一式がきれいに保存されているではないか。ワクワクする胸を押えてその名称、使用法などを聞かせてもらった、もちろん当時漉かれた障子紙、本丁紙あった。私が今まで県内で見かけた用具とはかなり異ったものばかりで資料的には貴重なものであった。

雪の殆んどない今年の冬ではあったがこの日は珍らしく積雪があり凍てついた山道を除行しながら今日の戦果に胸をふくらませ静かに下って行った。

（森田）

## おしらせ

- 昨年11月3日よりの「岡山県の歴史と文化」展も、本年3月28日をもって閉展となりました。貴重な文化財をお借し下さった方々、遠方より見学にお出の方々に厚くお礼申しあげます。
- なかでも香川県小豆郡出土の旧石器、倉敷市上東遺跡出土の弥生式土器、備前市新庄天神山古墳出土の石枕、小田郡矢掛町出土の下道氏銅製骨蔵器、岡山県各地の家形骨蔵器、倉敷市浅原安養寺裏山経塚出土の瓦経、高梁市宇治赤木家の赤韋威鎧、新見市赤馬三尾寺の毘沙門天立像、津山市高野神社随身立像、各種の古面、志呂神社頭文、木地師道具、木地製品、鉄砲台製作道具など注目されました。
- また刀剣も刀剣協会の会員各位のご協力により、県内の名品を陳列することができました。
- 年度末に展示替を行い、4月1日より新展示をお目にかけることができます。とくに中世の文書では、東寺文書が4点借用できました。京都の東寺の所蔵する文書は、質量ともに全国でも屈指のものでありますが、地方でこの一部が公開されるのは初めてであります。3点は備中国新見庄関係のものです。
- 倉敷地方の典型的な町屋の一部が原寸大で複製されました。一見を乞う。
- 図録を販売しております。ご利用下さい。

「岡山県の歴史と文化」　1部　450円
「岡山県の刀剣」　1部　400円

## 資料提供の御礼

新設博物館の悩みは、なんといっても館蔵品が少ないことであります。本館でも、各種資料をお譲りいただくよう、不躾なお願いをしてまわりましたが、幸い多くの方々のご理解をえて、優品を収集することができました。また、本館の完備した収蔵施設をごらんになり、安全保管のうえから貴重な文化財を長期寄託してくださった方も多数あります。そのなかには国重文6点、県重文3点も含まれています。これらの方々、および展示がえごとに多くの資料を快くご貸与くださった方々に、衷心よりのお礼を申しあげ、更に今後のご助力をお願いする次第であります。なお、入手困難な必要資料については、精緻な複製を作り補っていますが、その際、いろいろなご便宜を与えてくださった方々にも深く感謝しております。まことに有難うございました。

## 博物館日誌（主なもの）

46. 6.30　博物館建設工事が完工する。
　7. 1　県条例施行県立博物館発足
　　博物館職員も発令される。
　7.15　総合文化センターから新築の博物館へ引越す。
　8.28　開館記念式典が挙行される。
　8.29　博物館開館
　　開館記念講演　鎌木義昌氏、楢崎彰一氏
　　林屋晴三氏
　　特別展「岡山県のやきもの――縄文から現代まで」開場
　10.17　特別展を終了
　11. 3　常陳展「岡山県の歴史と文化」開場
　　後楽園入園との共通券となる。
47. 3.28　昭和46年度展示終了
　　講演塚本善隆氏、小田富士雄氏

## 編集後記

- 館報第1号をようやく発刊することができました。8月末の開館以来「やきもの展」11月からの「岡山県の歴史と文化展」とつづき、ひと息いれたところで、もう春の陳列替です。
- 借物90%で展示場を満たすためには学芸課5人の担当者のフル運転です。今回の記事は、こうした展示品の副産物です。
- 館報は今後年に2・3回出したいとおもいます。そして博物館と、これを暖く支持してくださった多くのかたがたとの連けいの一助にあてたいとおもいます。


博物館だより　№1

発　行　昭和47年3月1日
編輯者　岡山県立博物館
発行者　石川吉郎
岡山市後楽園1―5
電話（岡山）72―1148